

旧第一銀行熊本支店社屋に関する研究 (2)

詳細部分・設計者と設計図について

正会員 伊藤重剛¹⁾、松本隆之²⁾准会員 ○曾宮健一³⁾

1. はじめに

本稿では前稿に引き続き、旧第一銀行熊本支店の建築について、その詳細部について報告し、建物の現況と当初の設計案を比較して、どのように建物が改変されているかについて検討する。

2. 詳細部分

旧第一銀行熊本支店の建物は、西洋古典建築の様式に則っており、あちこちに彫刻された装飾が付けられている。内部でもっとも注目されるのが、営業室に2本立てられている円柱である。円柱はフルーティングのないトスカナ式で、柱頭の最下部には卵鏤装飾(egg and dart)が付き、そこから四方に肘木状の腕が突き出してその上のアバクスを支えている。(図4) 2本の円柱は東西方向の主梁を支えており、その端部は装飾的なもち送り(図6)となっている。1階営業室と支配人室を区切る木製の間仕切り壁の端部や、東側の円柱の後ろには木製の角柱が建てられている。柱身にはフルーティングが彫られ、柱頭部はトスカナ式となっている。東西の入口上部の水平アーチの両側には、植物をモチーフにした円筒状の装飾がついている。また壁面のアーチ窓の間には、円筒状の装飾に角型の渦巻きのついた装飾が付けられている。(図10、11)しかし、この装飾は断片が残っているのみで、後の改修のとき撤去されたようだ。同じように撤去された装飾としては、屋上パラペットのメダリオンや装飾的な手摺子などがあげられる。また塔屋にも円筒状の軒飾り(図8)が見られる。

3. 設計案及び施工時と現況の相違点

旧第一銀行熊本支店の社屋は、清水組(現清水建設)の西村好時の設計で、施工も同組によって行なわれ、大正8(1919)年に竣工した。このことは、現存する棟札(図9)¹⁾より明らかで、また当時の「建築雑誌」²⁾にも建物の概要とともに記載されている。西村好時による設計図(図1)³⁾も清水建設に現存しており、彼の設計案も確認できる。しかし調査の結果、建物の

現況と設計案とに相違点があることが分かった。上記『建築雑誌』の竣工写真(図2、3)によると、設計案通りに施工されたと確認できるので、現況と当初の案との違いは後の改修による変更と思われる。ここではこれらの資料を比較検討し相違点を以下に述べる。

3-1. 建物外部

「建築雑誌」の外観写真は、建物を南東から撮影している。この写真から建物の南側と東側のファサードにおいて、パラペットのメダリオンと手摺子、アーチ上部の間にある装飾、入口庇部分の装飾が確認されるが、現存していないので、後の改修のとき撤去されたものと思われる。実際、アーチ間の装飾の断片(図10)が現存しており、また壁面上部のコンクリート洗い出し仕上げは、少なくとも南側と北側では改修された痕跡が観察されるので、その際撤去されたものと推測される。パラペットの手摺子部分もそのとき塗り込められたものと思われる。

3-2. 建物内部

建物内部についても「建築雑誌」の写真を参照することが出来る。内部写真は顧客待合室の南東の隅から撮影したもので、2階吹き抜けの銀行内のほぼ全景が写っている。写真によると竣工当時、天井は浅いアーチ型であり、西村の設計案どおりに施工されていたことが分かる。現在1階の営業室には営業室の面積を小さくするために、仕切壁が設けられ、また天井を低くするため2階の床レベルに新しい天井が張られている。材料の種類や新しさから判断して、戦後中央信金の建物として使用されたとき、これらの改変がなされたものと思われる。しかし、当初のアーチの天井自体もはや残っておらず、有孔ボードの平天井が張られている。1階の付加された天井は、この2階平天井の有孔ボードを部分的に取り外し、屋根梁から下げた鉄筋によってつられているので、アーチ天井は少なくとも1階の付加された天井以前に改修されたと推測される。

1) 熊本大学助教授・工博 2) 熊本大学大学院生 3) 同学生

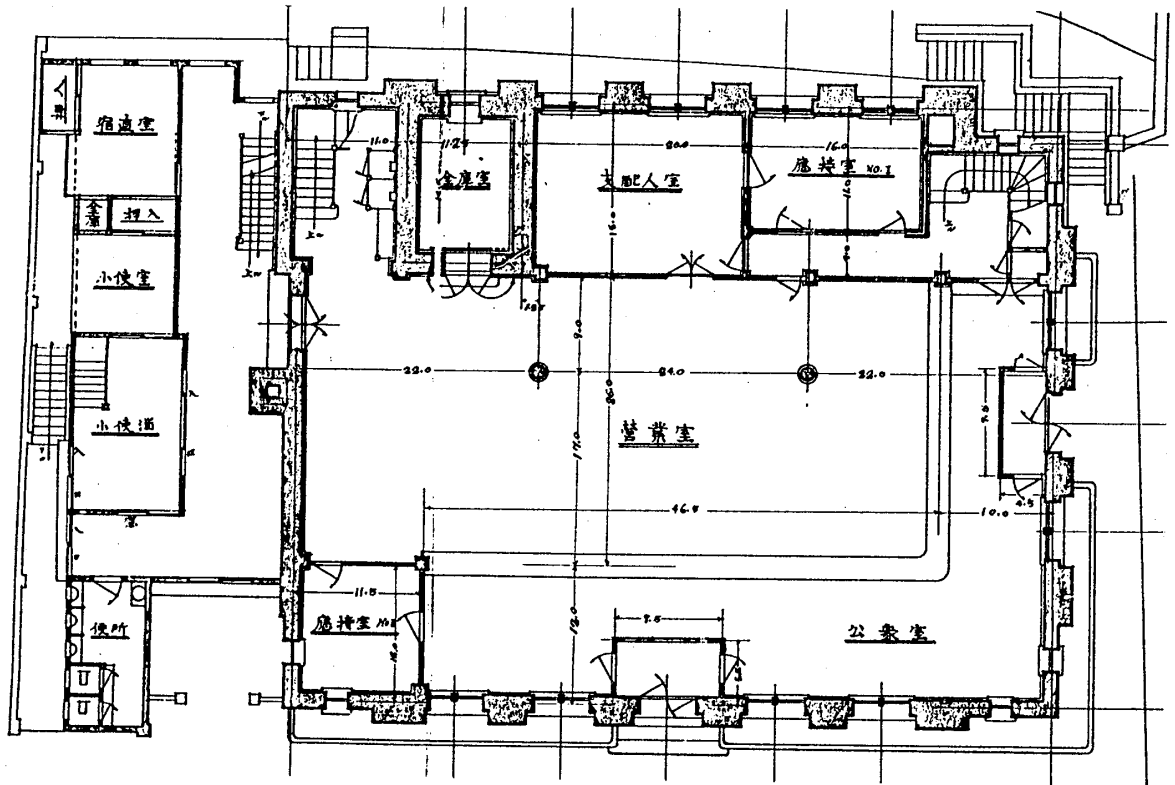


図1 設計者西村好時による1階平面図

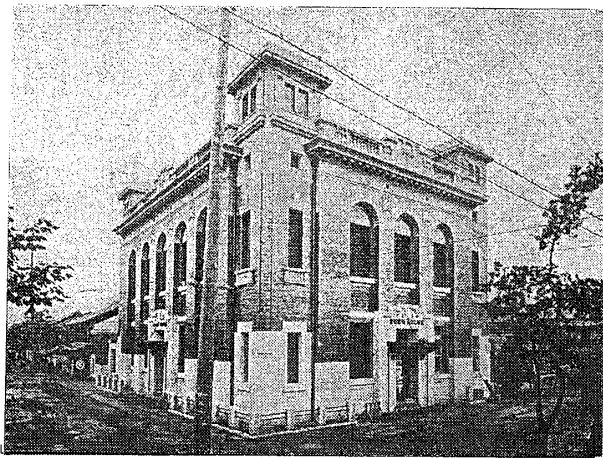


図2 竣工写真 (外観)



図3 竣工写真 (内部)

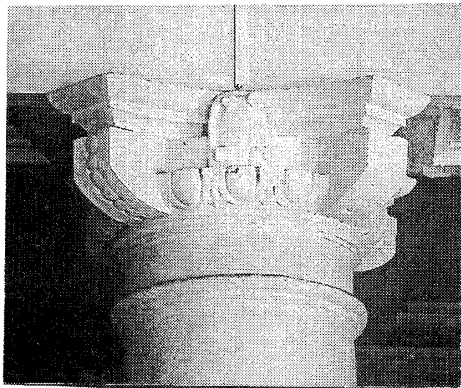


図4 円柱柱頭

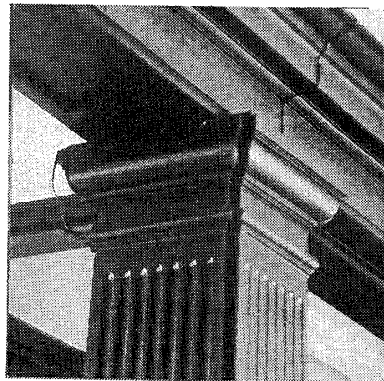


図5 角柱柱頭

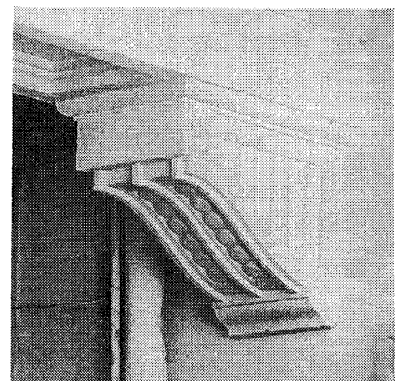


図6 1階主梁持送り

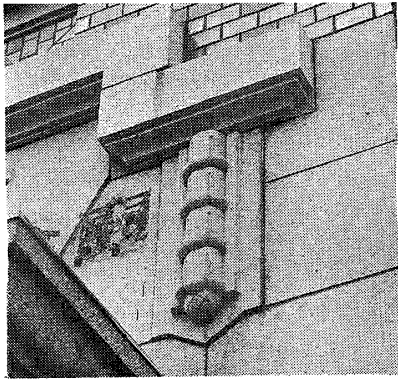


図7 入口上部装飾

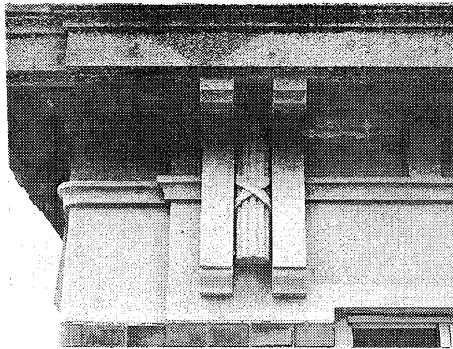


図8 塔屋軒装飾

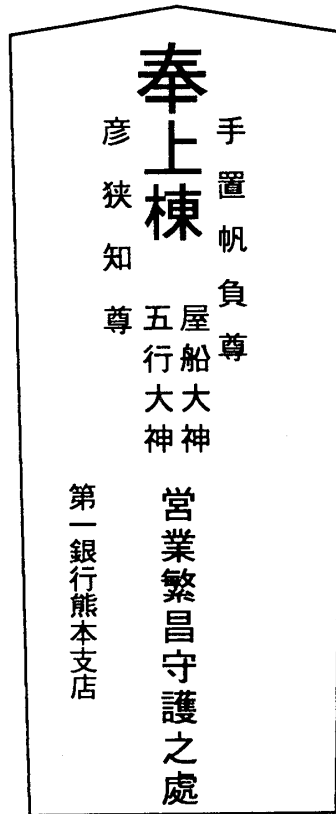


図9 棟札

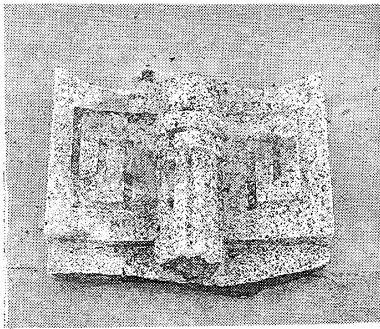
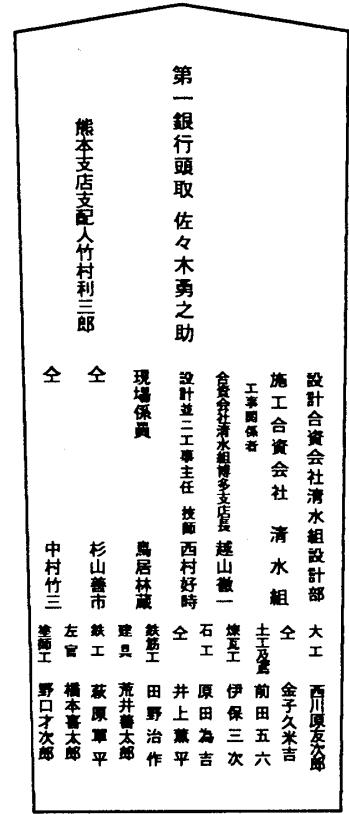


図10 壁面上部装飾断片

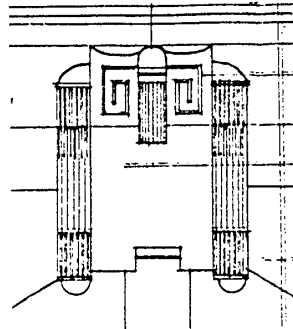


図11 壁面上部装飾

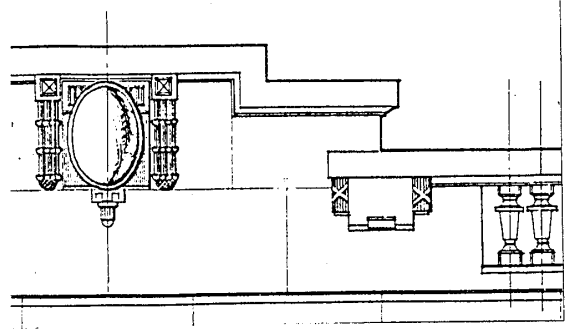


図12 パラペット部分装飾

営業カウンターには設計図では鉄格子が付けられているが、これは全く現存しない。またカウンターの待合室側の腰壁、点板も新しく改変されており、当初の状態に残っているのは営業室側の腰壁だけである。南側の風除室には鉄製のシャッター枠が設けられている。

これらのほかに、営業室と支配人室の間の仕切壁は、金庫の面と同一の、角柱と角柱を結ぶ直線上に設けられていたが、現在ではそれよりも北側に1.3mほど移動している。また写真では、仕切り壁は天井まで続いているが、現状では上部がなく、空間的には繋

がっている。現状で見える限り、壁の移動の痕跡や、仕切り壁上部を撤去した痕跡は確認できないので、竣工後あまり年数を経ないうちに、当初の設計意図を損なわないように細心の注意を払いながら、この改修がなされたと考えてよいだろう。細部を見ると、円柱には照明がとりつけられており、また2階のバルコニーの手摺は鉄製のデザインされたものであったが、現在は木製の縦格子に代えられている。

空調設備による改変も顕著である。空調用の匝蝸^{メカニカル}機械が東側階段室に取り付けられ、そのダクトが支配人室上部、2階のバルコニーなどに取り付けられてい

る。

2階も大きな改変が見られる。顕著な例は、設計案にない金庫室が1階の金庫室の真上に作られている。その結果、ここの窓はコンクリートで塗り込められている。したがって、設計案で予備室と称されている部屋が縮小されている。また広く取ってあった階段室も仕切り壁を設けて小部屋が作られている。2階の金庫室は設計案には計画されていない。

同様に地階は、設計案では風呂場・食堂・倉庫として計画されていたが、書類などの保管庫に使用されるようになった。そのため窓がコンクリートで塗り込められている。また壁の配置も設計案と多少の違いが見られる。付属棟においては、設計案では木造2階の建物であったが、当時のものは取り壊され、現在では鉄筋コンクリート造のものが建てられている。

4. 設計者および建築史的位置づけ

設計者の西村好時（1886～1961）の経歴は、彼の作品集である「西村好時作品譜」⁴⁾に詳しい。それによると、彼は明治19年横浜で生まれ、東京高等師範学校付属小学校、同付属中学校を経て第四高等学校を卒業。明治45年7月に東京帝国大学工科大学建築科を卒業した。その後彼は、大正3年清水組（現在の清水建設）設計部技師となった。彼は第一銀行関係の設計を中心に、50以上もの銀行建築を手掛けている。2度に渡り欧米へ銀行建築の視察旅行にでかけ、著書に「銀行建築」⁵⁾を著し、銀行建築のスペシャリスト評されている。「作品譜」の年譜によると、旧第一銀行熊本支店の建築は、彼の手掛けた銀行建築の中では第3番目、その他を含めても第4番目の作品であり、建築家としての彼の長い活動の最も初期の作品に属するものである。

「日本近代建築総覧」⁶⁾によると、熊本県に建設された大正時代の建物は、大正8年の旧第一銀行熊本支店をはじめとして、大正11年の旧九州日々新聞社、大正12年の旧安田銀行山鹿支店、旧九州新聞社、熊本高等工業専門学校など21棟が挙げられている。旧第一銀行はそれらのうちで最初の建物であり、その意味で熊本の鉄筋コンクリート建築の先駆けとなった建物である。

「近代日本建築学発達史」⁷⁾による年代区分では、

彼が設計活動を行なった時期は、近代建築を6つに区分したうちの第4期（大正元年～11年）以降である。この時期は第1世代の煉瓦造建築の時代が終わりを告げ、鉄骨と鉄筋コンクリートが普及し始めた時代である。大正8年の旧第一銀行熊本支店社屋は、まさに煉瓦造から鉄筋コンクリート造への過渡期であり、この状況は外壁の構造がレンガによる組積造という混構造という点に顕著に表れている。

5. 結語

今回の調査によって、旧第一銀行熊本支店社屋の現況を明らかにし、それが当初の設計案とどのように改変されているか、明らかにすることが出来た。この建築は、最近ある民間企業によって保存修復され、再利用することが決定した。したがって、調査結果は、今後の保存修復のための基礎資料として、充分役に立つものと思われる。

注

1) 棟札の大きさは、上部幅370mm、下部幅360mm、総高さ892mm、肩高862mm、厚さ29mmである。

2) 「建築雑誌」第34輯、第398号、建築学会発行、大正9年2月、pp. 129

3) 清水建設に保管された設計図面は、A1サイズで合計15枚、平面図、立面図はもちろん構造図、矩計図まで揃った完全なものである。

4) 『西村好時作品譜』城南書院、昭和25年

5) 西村好時『銀行建築』、丸善、昭和8年

6) 日本建築学会編、「日本近代建築総覧」、技報堂、1980年、pp. 404 - 407

7) 日本建築学会編、「近代日本建築学発達史」、丸善、昭和47年